

# かわらばん すまし屋 ハウス

2024-3  
vol.  
297

発行  
有限会社  
大和久建築  
TEL 0475 (22) 4148  
茂原市高師 4 7 6

香港が1997年に英国から中国へ返還され、その後50年間は一国二制度が保障されていたものの、近年選挙制度などで民主化が損なわれるなど中国の強行が見え隠れしています。現在台湾が中国統一問題に直面しており武力行使の可能性も耳にします。日本との関係のある台湾だけにその影響は対岸の火事とは言っていないようです。

☆今月の一言【星火燎原】はじめは小さな力でもやがて大きな勢力に成長すること。「星火」は小さな火花。元はほんの小さな火花でも野原を焼き尽くすことができる程になる、転じて小さな革命運動がやがて支配層を覆すという意味を込めて使った言葉。

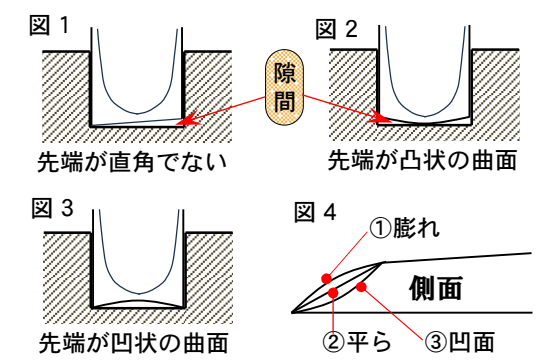


写真A：右から4本目（8分鑿）以外は、先代が使用していたものを受け継ぎ、現在使用している鑿。筆者が使用を始めて41年。普段使用するものだけでもこれだけ揃える必要がある。右6本が叩き鑿（骨組み等加工用）、左8本が大入鑿（造作加工用）。

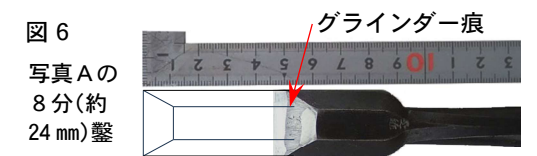
## 鑿（のみ）

荒仕事から細密な造作まで、掘る、欠きこむ、削るなど多用途な「鑿（のみ）」。加工の幅や広さに応じて使用するため、大小兼ねることができにくい道具なので、刃幅に応じて数多くの種類のものを揃える必要があります。必要不可欠な道具ではあるものの、建築様式の変った昨今、頻りに使うのは一部のものです。多くは使用機会が少なく道具箱に眠っているものも少なくありません。

以前紹介した鉋や鋸のように一見さほど調整や手入れの手間がなさそうな鑿ですが、実は意外に高度な技術を要することがあります。



写真Aの1寸(約30mm)鑿。先代からのものでおそらく70年以上使用。残りは約2cm。柄も同様に消耗。



写真Aの8分(約24mm)鑿。40年以上使用した鑿。新品時は刃長が約9cm。

刃先が図1・2のようだと穴の隅部に刃が届かないため、刃先は直角に（筆者は感覚的に図3のように研ぐよう教わった）研ぐことを求められますが、これがなかなかの曲者。鑿には柄が付いていることに加え鉋に比べ刃幅が狭いことから、左右上下にぶれないようバランスよく研ぐことが難しいのです。以前「一分鑿（刃幅が約3mmの鑿）が研げれば一人前」という話を耳にし、筆者も何度か試みましたがその難しさを実感。また表の研ぎ面も図4の①だと刃先の角度が大きくなり切れ味を損ねやすいので②あるいは③である（これは感覚）ことが望ましい状態。また両端に欠損がないことも重要。刃が欠けた際早く刃を卸すためグラインダーで削る（左写真）こともあります。刃を焼いてしまう恐れがあるので要注意。

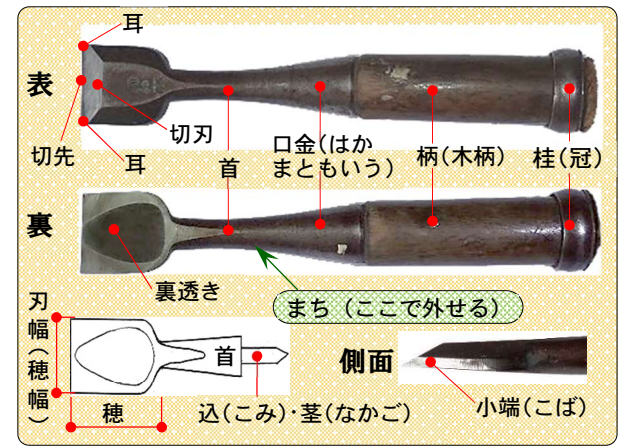
以前、先代が左頁図5の鑿より更に使い込んだ残り約1cmしかない鑿を使っていたら、傍らで見ていた方が「こういう鑿が売っているのですねえ」と感慨深げに発したので「いやいや使い込んで短くなったのですよ」と答えたところ大層な驚きようでした。一寸した笑い話です。

◆右に鑿の各部位の名称を紹介します。文献や資料により若干表現が異なるものもあります。

### ◆鑿の種類と用途

鑿は単に幅の種類が多だけでなく、大別して「叩き鑿」と「仕上げ鑿」と分けられ、さらにその中で叩いて使うもの（骨組み加工や荒加工用）と突いて使う（仕上げ用）ものがあります。

- 1 叩き鑿（たたきのみ）：構造材加工や現場での荒仕事などで使用。力強く叩くため穂が厚く頑丈に出来ており「厚鑿（あつのみ）」とも呼びます。
2. 大入(れ)鑿（おおいれのみ）：穂厚が薄く細かい作業に適し、主に造作加工に使われるので「造作鑿（ぞうさくのみ）」とも呼ばれています。他にも「追入鑿」、「尾入鑿」、「押入鑿」などの書き方があり「おおいれ」・「おいれ」・「おいいれ」のいずれかで呼ばれています。ちなみに竹中大工道具館のホームページ上では「大入鑿」が採用されています。
3. 突き鑿（つきのみ）：荒い加工面を仕上げたりするためのもので、叩かず手で突いて使用するため柄が長く桂（冠）も付いていません。手で押して表面を透くようにして使うことから「透き鑿（すきのみ）」とも呼びます。下左写真は当社所蔵の構造材仕上げ加工用で全長は約60cm。
4. その他：曲面加工のための「丸鑿（まるのみ）」、溝の底面を削る「鋟鑿（こてのみ）」など特殊なもの、また造作用で突き鑿類の「鑄鑿（しのぎのみ）」や「薄鑿（うすのみ）」など多種あります。



ざつがくの庭 冷え切った身体を温めるには入浴が一番。家風呂も良いけど気分を変えてたまには広々とした銭湯も乙なもの… 戦前までは風呂と言えは銭湯のことで、現在のように浴槽にたっぷり湯を張るようになったのは江戸時代後半。当時湾港や川筋に停泊し営業する移動式の風呂屋があり、船内に設けた浴槽に湯を張ったのが始まりで、この船の銭湯が「湯船」。後に浴槽の呼び方に転じたのだそう。

- 読めますか？
1. 荒む
  2. 饅える
  3. 羹
  4. 匆ねる
  5. 九折
  6. 蒲魚

答え 1. すさ・む 2. す・える 3. あつもの 4. は・ねる 5. つづらおり 6. かまとと

次号をお楽しみに